

に多い。これこそ、本書が他書の追隨をゆるさない所である。また、今一つの特徴は、事情やむを得ずして拓本によるとしても、最もよいものを選ぶことに努力してゐるといふことである。難讀と稱せられる奴兒干永寧寺碑、重建永寧寺碑の二者については、梅原博士の手拓にかゝり、内藤乾吉氏の所藏せられる精拓により、従来よりも解讀の歩を進め得たことの如き、その好例であらう。

本書の刊行を紹介し、あはせて、交通不便の地に、時には身邊の危険をさへ感じながら、この事業を達成せられた編者の勞苦に對して敬意をさへげたい。更に、吾人は、滿洲だけではなく、北支に於ても南支に於ても、この種の事業に着手できる日が早く來てほしいと希望するものである。(四六倍判、二六一頁、圖版十四、昭和十四年三月、南滿洲鐵道株式會社發行、非賣品)

(外山軍治)

列強現勢史・東中歐諸國

大類 伸著

思ふに、妥協は必ずしも最後の解決ではない。かのヴェルサイユ條約は、歴史と自然とを無視した人爲的體制であり、一種の妥協とも云ふべきものである。そして其の後に來るべき歴史の過程は、この妥協に對して求められた解決であつた。

「ロイド・ジョージは、世界大戰後のヴェルサイユ條約が強ひて作つた東中歐諸國の新地域的體制を指して、中央ヨーロッパをバ

ルカン化したと云つたが、實に東中歐の新形勢は、その人種的分布から見ても又經濟的條件から見ても、極めて複雑なもので、幾多紛争の種子を將來に含んで居るものであつた。」「百二十七頁」、この幾多の紛争を歴史的に解明せんとするのが、本書の使命なのである。

我々が現代の歐洲諸情勢に眼を轉ずる時、そこに浮ぶ疑問の課題として、何故世界大戰後のオーストリアは獨立形態を維持し得なかつたのであらうかと叫ぶであらう。この問題に對して著者は根本原因としての物質的條件と民族問題とに就て説明して居られる。即ち、大戰後のオーストリア國民の工業方面の所得は國民全收入の三分の二を占め、之を人口構成上から見ると、工業・鑛業・商業・交通運輸業等の従業者合計は、總人口に對する四十二・三%である。」「百六十八頁」所か、「農林業人口は僅かに三十四・七%と云ふ不均等な數字を示し、更に農耕地缺乏の程度は一層甚しく、總面積に對する農耕地の割合は僅かに二十三%に過ぎなかつた。」「百六十九頁」、かくて、「穀物の不足、中小商工業民衆乃至小市民層の充溢——これが世界大戰後の新オーストリア國家を彩る一つの原色となつたのである。」「百七十頁」、このやうに、「新しいオーストリアは工業國となつたが、而も其の資本主義的な發達は外國資本に依つて、移植されたもので、新オーストリアは獨立の物質的要件を缺いて居るものであつた。」「百七十一頁」、更に著者は其の民族問題に言及せられて居る。即ち、「オーストリアの國粹國家主義の體系程深刻に矛盾したものはなく、例へば、ドルフスや

ジュシユニツクが祖國戰線を結成してナチスに對抗した時、祖國主義は民族的基礎を全く缺いて居り、こゝでは祖國愛は民族愛と結び付かず、否むしろ眞正面から衝突したのである。(二百四頁)かくて、「オーストリアに於ては、祖國愛の覺醒は排外主義的な獨裁政治の確立に何等の決定的な役割を演ぜず、それ故にオーストリアの特權階級は古色蒼然たるカトリック主義やハプスブルク家復讐問題を持ち出して、排外主義の代理を務めさせようとしたが、さういふ舊時代の守札が最早何等の威力をも持ち得ないことは、たとへ下層階級の者でも有識者は見抜いて居り、殊に首都ウィーンには社會民主主義の思想を通り抜けて來た貧しい焦燥の小市民層が多く、彼等にとつては、オーストリアの陳腐な祖國主義よりも、社會主義を通つて來たドイツの國家社會主義の方が遙かに魅力があつたのである。」と。如上の見地から著者は、オーストリアの獨立維持の不可能であることを論證せられ、次にドイツとオーストリアとの關係が如何に密接であるかを述べて、獨逸合邦は歴史的に必然的な現象と觀て居られる。そして著者は更に、「獨逸合邦はドイツの東方進出の欲望を満足させた一面と共に、むしろ其の欲求に拍車をかけた他面をも見逃せない。」(二百十頁)として居られる態度は注目に値するものである。

即ち、「獨逸合邦はドイツの工業、特に重工業部門の要求に全く一致し、その發展を愈々促進するものであつた。」(二百七頁)として獨逸合邦の積極性を強調せられ、他面に於て、「此の合邦を農業經濟より考察する時には、工業國オーストリアの併合は、ドイツ

の食料問題を解決したのではなく、反つて一層重大化したのである。(二百九頁)として今後のドイツ史の新方向を豫定せられた點に敬服に値するものがある。殊に著者の歴史認識の科學的態度は、ズデーテン問題に至つて愈々深く、讀者に幾多の暗示を與へるものがある。即ち、「チエツコスロヴァキアに住む三百萬のドイツ人——全人口の二十二%のドイツ人の勢力が如何に大きいものであるかを述べ(二百七十九頁以下)、併せてチエツコ人とドイツ人との民族鬭争は、ズデーテン地方の割譲を必然的にもたらしたと説明せられ(二百八十五頁以下)、更に語を續けて、「實に當時のチエツコスロヴァキアは平和の祭壇に捧げられた生贄であつたが、今次の解決が果して今後の世界平和を維持し得るや否やは疑問である。」(二百三頁)として、飽くまで科學的認識を保存して居られる點に敬服せざるを得ない。

更に歴史家としての著者の態度には、學徒の學ぶべき多くのものを含んで居る。即ち、種々な國際關係の微妙な動きの多様性を通して歴史現象を認識せんとされる態度である。この態度はポーランド問題に於て明確に表現されて居る。即ち、「多數ポーランド人の居住するテツシエン地方の合併はポーランド多年の宿望であつたが、今回の達成は全くドイツとの密接な提携の賜物に外ならない。さればドイツが東南方面への進出に専念する限り、今後もポーランドはナチス・ドイツとの提携を有利とするであらう。」(二百二十四頁)と述べ、反面には、「ポーランドとドイツとの關係は、ウクライナを繞つて極めて微妙であり、而もポーランドはドイツ

の目覚しい東南進出を憂慮したものが、最近に突如ソヴィエツト援助條約を再確認したのである。勿論それが直ちにドイツとの親善關係を清算したものでないことは明かではあるが、國際關係の動きは極めて微妙にして一本調子ではない。「(三百二十四頁)と解明せられたのは一例である。

ともあれ、この書こそ我々歴史家は勿論のこと、一般現代人の教養の書としても、萬人必讀の書であることを力説しておきたい。最後に、この書を著はされた著者及び、其の協力者として努力され、現在中支方面の第一線に立つて御活躍中の萩中三雄氏に對して敬意を表し、併せて未來の御多幸をお祈りする次第である。

(富山房百科文庫、第八十一卷、頁數三百五十三、寫眞十三、一般參考書、人名索引收録、昭和十四年五月十五日發行、定價八十錢)(辻本倉雄)

初期の英國國會に就いて

エヴァンス著

Evans, E.: Of the Antiquity of Parliaments in England: Some Elizabethan and early Stuart opinions.

ノルマン國會(magnum concilium)の英國會(parliament)の脱胎が英國政治組織に對して與へた影響の甚大さ、或は又英國憲法史上に於ける英國會制度の占める地位の重要性に就ては今更述べる迄もない。英國史を繙く全ての人々が熟知する如く、Tudor

朝王權の絶頂と言はれる Elizabeth の治世は樞密顧問を輔佐とする専制政治であり、國會をば單に課稅機關として取扱ふに過ぎなかつたものではあつたが、不干渉を再三再四命ぜられ乍らも尙下院は腹藏なき直言を女王に與へ國家政策に關する彼等の要求を主張し、殊にその晩年に於ては次代に於ける國王對國家の大衝突の豫兆をば示してゐるのである。一般に十七世紀の憲政史は國王と國家との爭鬪史であると云はれるが、政情の變化と Stuart 諸王の抱く主張と且又その國會自體の內的變化との觀察は容易にその争を理解せしむるであらう。Evans 自身の表現に従ふならば、Parker 大僧正職と Madox との間の時期は英國中世學問の開拓期であつたと俱に「激争の後の一聯の勝利による國會の優越性の成功をば表示するもの」であつたのである。かゝる時代の歴史家及び法制史家が國會の起原に深い關心を抱いた事は當然であるが、又彼等の意見が政治的宣傳の爲用ひられた事、更にその研究の方向や性格に政治的結果の影響したであらう事も確かである。事實この時代にあつて熱情や黨争に全く觸れないでゐる事は不可能であつた。従つて吾々もその事に就ては正當なる理解を以て、この時期に於ける國會起源論に對すべきであらう。勿論 Evans の云ふ様に Civil War 以前の斯る記述は後のもの程著名なものではなく、Prynne 程な主題の取扱ひも又 Brady 程の完成した評論をも提供しないであらう。而も今尚ほ解決の問題が此處に始めて述べられてゐる事及び當時の憲政的係争問題の解決を寧ろ舊制に訴ふ事に依て試みた斯る著作の意義は確かに注目するものであると思はれ